間盗り

見坂　卓郎

いつも通り客足のない、気の抜けた昼下がりだった。哲司は古びたソファに腰かけ、スポーツ紙を片手にタバコをふかしていた。そこへ、若いのがいきなり転がり込んできた。三日前にここで部屋を借りた、伊藤という学生だ。頬がリンゴみたいに赤く、孫でも見ているような気持ちになったのを思い出す。

「おう、どうしたリンゴ坊主。今日は青リンゴみてえだな」

伊藤は落ち着かない様子で口をパクパクさせた。顔がすっかり青ざめている。

「どうした。お化けでも出たか」

「いや、それが」

「まあ落ち着け」

伊藤は一度深呼吸すると、絞り出すような声で言った。

「な、なくなったんです。部屋が」

「……なんだと？」哲司はタバコを灰皿に押し付けた。「なくなった？」

「はい。うちは１ＤＫですから、ダイニングキッチンと、洋室があったはずです。間違いありません。でも気がついてみると、洋室がどこにもないんです」

「そういうことか」哲司は新しいタバコに火をつけ、ふうと長く煙を吐いた。「間盗りだよ」

「まどり？」

伊藤はまるい目をぱちくりさせた。

「そう。文字通り、〝間〟を盗んじまう連中さ。日本が貧しかったころはそこらじゅうにいたもんだ。俺たちの仕事は、やつらとのせめぎ合いだった。それほど土地に飢えてたんだ」

哲司は遠くを見つめるような目で言った。

「だが、間盗りなんてのはとっくの昔に滅びたはずだ。今どき間盗りに遭うなんて、よっぽどの間抜けだよ」

伊藤の頬が、今度は真っ赤に染まる。青くなったり赤くなったり忙しいやつだ。

「しばらく待てば返ってくるさ」

「それが、これから田舎の両親が出てくるんです。部屋を盗られたなんて、言えなくて」

哲司は思わず舌打ちした。「とことん間の悪いやつだな」

「どうか助けてください」伊藤は深々と頭を下げた。これからパチンコに行こうとしていたが、この若造を放っておくわけにもいかない。

「……ったく、手間かけさせやがって」

スポーツ紙を二つ折りにすると、哲司はどっこらせと腰を上げた。

「助けてくれるんですか？」伊藤のうるんだ瞳がまっすぐ見つめてくる。

「貸したこっちも無関係とはいかないからな」

＊

アパートの正面に立つと、全体にくたびれた印象を受けた。予算をぎりぎりまでケチってきたが、そろそろ外壁を補修する時期だろう。玄関に入ろうとしたとき、一匹の黒猫が二人の前を横切っていった。

問題の部屋に入ると、ダイニングキッチンの奥にあるはずのドアが、きれいさっぱり消えていた。物件の間取りはすべて頭に入っている。染みひとつない真っ白な壁は、人を拒むような冷たさを帯びていた。

「見事に盗られてるな」哲司は言った。

「いったいどこに行ったんでしょう」

「どこにも行っちゃいねえよ」哲司は白い壁紙をなで、手の甲で軽く叩いた。「土地は不動産っていうだろ。だから絶対に動くことはないんだよ」

「でも……」

「たとえば、そうだな」哲司は伊藤の正面に立ち、その目を見据えた。「俺はいまここにいるだろ。お前はこの部屋で俺に会うことができる」

「ええ、はい」伊藤は困惑の色を浮かべた。

「じゃあ昨日はどうだった？俺とここで会えたか」

「いえ、会えませんでした」

「そういうことだ」哲司は身体を離し、また白い壁の前に立った。「同じ場所にいても、昨日のお前は俺と会うことはできない。つまり空間は同じでも、時間軸をずらすことでそこには行けなくなる。それが間盗りのやり方だ」

「この洋室も、別の時間に飛ばされてしまったということですね」

「そうだ」

伊藤はぶつぶつと何かつぶやき、やがて顔を上げた。

「それで……どうやれば取り戻せるんですか」

「これを使う」哲司は古い革鞄から、ダイヤル付きのドアノブを取り出した。

「部屋の時間軸を固定するための装置だ。おそらく中にいる犯人も同じものを使ってる」

手のひらの上で金属の塊が鈍く光る。小さな目盛りが円周に刻んであり、指で回すとかすかなラチェット音がした。もう何年も使っていないので、うまく機能するかは分からない。

「壁にこれを取り付けて、向こうと同じ〝時間〟に合わせる。それから中にいるやつの名前を呼んでノックする。時間と名前が合っていればドアが開く」

「それって、タイムマシンってことですか？」

「そんないいものじゃない」哲司は苦い顔をした。「時間の流れから切り離された部屋は密室になっちまう。誰かにドアを開けてもらわないと外に出られないんだ。だからせいぜい、部屋を盗んで立てこもるだけのチンケなシロモノだ」

次に哲司は分厚い台帳を取り出した。ごわごわにふくらんだ用紙は黄ばみ、角がふやけている。

「この台帳には、アパートを借りた連中の名がすべて記されてる。こんなボロアパートをあえて狙うんだから、犯人はこの中にいるだろうさ」
「名探偵みたいですね」伊藤は目を輝かせ、台帳のページをめくった。「この黒い丸は何ですか」
「印の付いてるやつはもうこの世にいない。……まあ、不審死も多かったが」
「ちょ、ちょっと待ってください」伊藤がうろたえた。「それって事故物件じゃないですか」
「細かいことは気にするな」
哲司はドアノブを壁に固定し、目盛りを指先で探った。月日の目盛りをひとつ戻し、時間をさかのぼっていく。ここぞという場所で名前を呼んでノックする。返事はない。また目盛りを動かす。ノック。それをひたすら繰り返す。二人きりの部屋の中で、金属音とため息がこだました。カチ、カチという無機質なラチェット音が、秒針みたいに気持ちを追い立てる。
何度も同じ動作をするうちに、哲司の集中力は異様なほど研ぎ澄まされた。まるで哲司自身の時計が逆回転し、間盗りと争っていたころの時代まで若返ったようだった。
気づけば二時間ほど経っていた。いやな汗が背中をつたう。
「ご両親はいつ来るんだ？」
「あ！」いまさら思い出したように伊藤が声を上げる。「まずいです、もう一時間しかない」
「くそっ」哲司は壁を思いきり叩いた。しかし、当然ながら返事はない。
伊藤は泣き出しそうな顔をしている。そのリンゴみたいな顔を見て、哲司はハッとした。
「――まさか」
哲司はダイヤルを未来の方向に回転させ、ドアに向かって声を張り上げた。
「おい、伊藤。そこにいるんだろう」
となりで伊藤が目をまるくしている。続けてもう一度、彼の名を呼んでノックする。
「……はい」
中から返事があった。二人は思わず顔を見合わせた。
「声が、しましたね」
哲司はうなずき、ドアノブに手をかけた。
「お前は絶対に中をのぞくんじゃねえぞ」
おそらく、二人が鉢合わせになればまずいことになる。これは直感だった。
汗ばんだ手をズボンでぬぐってからドアを引き、隙間に顔を差し込んだ。薄暗い洋室の真ん中に、もう一人の伊藤が座り込んでいる。〝明日〟の伊藤は、細かく肩を震わせていた。
「何か、まずいことがあったな？」
哲司が声をかけると、彼は力なくうなずいた。
「もうすぐ、そちらに両親がやってきます。でも、飛び出した黒猫をよけようとして、車が……」
伊藤はこらえきれないとばかりに泣き出した。
「場所はどこだ」

「家の近くの国道です。――どうか、助けてください」
哲司がうなずくと、彼は深々と頭を下げた。部屋の内側にもうひとつのドアノブが見えた。あれはおそらく〝明日〟のドアノブだ。哲司はそっとドアを閉め、〝今日〟のドアノブを鞄に放り込む。
いつの間にか、洋室のドアは元通りになっていた。中のドアノブが外されたのだろう。部屋にはもう誰もいない。
「行くぞ」
有無を言わさず、おろおろする伊藤の手をつかんでアパートを出た。もう時間がない。あいつはわざとドアノブを盗んだのだ。時の〝間〟に手を伸ばし、助けを求めるために。
「とにかく黒猫を探せ。見つけたら絶対に逃がすな」

＊

二人は路上へ飛び出した。親子連れを追い越し、自転車の隙間を縫い、風のように駆けていく。胸がひゅうひゅう鳴り、口に鉄の味が広がった。
「で、どんな、車だ？」
「白の、軽です」
ぜえぜえと息切れしながら走る。やがて国道の高架が見えてきた。夕焼けは色を失い、車のライトがひとつずつ点灯していく。
そのとき、歩道の植え込みが揺れ、黒い影が飛び出した。
「あっ！」
弾かれたように伊藤が駆ける。その黒い影はまさに車道へ躍り出ようとしていた。伊藤が身をかがめて腕を伸ばす。黒猫は低く鳴いて身をよじり、なおも車道に向かっていく。伊藤は猫を胸に抱きとめ、もつれるように歩道まで転がった。
哲司は思わず息をのんだ。あわてて駆け寄ると、伊藤が膝をつき、よろよろと立ち上がった。
その直後、白い軽自動車が目の前でキュッと停まった。助手席の窓が開き、温和そうな女性が顔を出した。
「あらまあ、迎えに来てくれたのかい。……おや、かわいい猫ちゃんだこと」
哲司は彼に向かって親指を立ててみせた。伊藤は照れたように笑い、ハンドサインを返す。黒猫が彼の胸でニャアと鳴いた。間の悪い男は、大事なときに間一髪で間に合った。
別れ際に、伊藤がそっと耳打ちした。
「おかしいと思いませんか。両親が無事なら、〝明日〟のぼくはあの部屋に現れる必要がない。だとすると、〝今日〟のぼくは、両親を助けられない……」
そこまで言って、伊藤は「あっ」と声を上げた。
「ぼくは――悲しむふりをしたんだ。本当の悲劇を防ぐために」

「お前なら立派にやれるさ」哲司はその背中をぱしんと叩いた。「間盗りにも今回だけ目をつぶる」

伊藤はうるんだ目を両親に向け、力強くうなずいた。

「ところで……」今度は哲司が耳もとに口を寄せた。「あの洋室、妙なのがわんさか出るんだよ。せいぜい気をつけな」

哲司がニヤリと笑うと、伊藤はたちまち青リンゴになった。〈了〉